

本誌の「出会い」シリーズでは、夫婦がどのように出会ったかというお話を何度も連載しましたが、今回は、未婚の読者のために札幌クリスチャングループの岡田好弘牧師から「恋とは？ 結婚とは？」というお話をさせていただきます。

ちなみに、岡田先生は「あたらしいみかんのむきかた」（小学館）というユニークな本の著者でもあります。

## 「恋とは？」

### 結婚とは？」

結婚を願うクリスチャンへ

岡田 好弘

（札幌クリスチャングループ牧師）

### ■恋とは何か

昨年フィリピンで持った恋愛結婚セミナーで愛と恋の違いについてから話し始めようとしたところ、日本語と同じ意味で「愛と恋」を表す単語は英語にもタガログ語にもないことに気がつきました。そこで、まずことばの定義をするために、第一コリント13章のみことばから「恋」とは何かを説明いたしました。

とはいっても第一コリント13章に書いているのは恋ではなく、愛についてです。でも、このことばを反対に言い換えるときに、恋というもののさまざまな姿が浮かび上がってくるのです。

「恋は不寛容であり、恋は不親切です。また人をねたみます。

恋は傲慢して、傲慢になります。礼儀に反することをわるびれず、自分の利益を求め、怒るし、人のしたことを根に持ちます。

不正もやります、うそもつきます。がまんなんかできないし、もう誰も信じられない、期待は裏切られ、すべてを耐えることができません。

恋とは、なんとほかないことでしょうか」

もちろん、「恋」が意味するもの全てがこのような否定的なものではありません。また、実際には愛と恋を明確に分けて考えることは出来ないでしょう。けれども、その傾向を理解するなら、リスクを排除することが出来るのです。

第二サムエル13章のアムノンの自己中心的な行動は、第一コリント13章の読み替えの通り、彼が決してタマルを愛していなかったことがわかります。

恋心を持つことが否定されるわけではありません。それは、神が人に与えた素晴らしい感情の一つです。しかし、たとえば食

欲に振り回されているはその人の健康を害してしまうと同様に、神が与えたからといってそれを自由に楽しみ過ぎないほうが賢明なのです。

### ■人によって独身者にさせられた者

今日の晩婚化現象は、単に結婚したくななくなったわけではなく、恋愛そのものが面倒くさくなってしまっているのです。その大きな原因の一つは、世の風潮に乗せられ恋愛感情を満足させようとするとうちに傷ついてしまっていることにあると思います。

両思いについても言えますが、特に片思いの失恋というのは、夢想していたものを失っただけで、何も失っていないにもかかわらず「大きな喪失感をもたらす」という意味において、その破壊力は特別です。

もともと存在しないものを恋慕していたという点では「偶像」と通じるものがあります。事実、旧約聖書（新改訳）の中に登場する「恋」という単語の多くは、偶像礼拝と関連して描かれています。

マタイ19章12節に「人によって独身者にさせられた者」ということばがありますが、これは遠い世界の宦官の事だけではありません。そのような人は数え切れないほど存在しています。

世の風潮に乗せられ恋愛に傷ついたり、周囲の破綻した数多くの結婚の実例を見せ

られて結婚に夢が持てず独身であることを選ばれてしまうなら、それはもはや自分の決断というより、人によって独身者にさせられたものなのです。

### ■恋愛感情の目的

神が人に恋愛感情を与えた本来の目的の一つは、結婚を促進するための動機付けです。また、まったく異なった男女が一つとなっていく結婚という過程を有効に乗り切るためのエネルギーです。

そして何よりも、夫婦が互いを楽しむためのものです。今の世の中にはさまざまなエンターテインメントが存在するので気がそらされていますが、神は本来、結婚生活を通じて人の全ての領域を満たすことが出来るようにデザインされたのです。

「日の下であなたに与えられたむなしい一生の間に、あなたの愛する妻と生活を楽しむがよい。それが、生きていく間に、日の下であなたがする労苦によるあなたの受ける分である」(伝道者の書9章9節)

(以下略)